視点

チャタムハウス

ツネイシホールディングス株式会社
特別顧問
伏　見　泰　治

もう30年近く前になるが、大蔵省（現・財務省）からロンドンの王立国際問題研究所（The Royal Institute of International Affairs）に派遣され２年間過ごした。

初代ということで右も左も分からず行ったが得難い、刺激的な経験をすることができた。（その後も派遣が続き、現在14代目が在籍中。）

そこは一般にはチャタムハウスと呼ばれている。建物が元々は大ピットの居宅で、大ピットがチャタム伯爵だったことによる。（チャタム、Chathamは地名。）トインビールームという部屋があるが、トインビーが“歴史の研究”を書いていたと分かった。（イギリス特有のこういう有職故実の類いはすべて行って初めて知った。）

着任してしばらくしてユーゴの紛争が始まった。一体何がどうなっているか分からない。勉強会の案内があったので出てみることにした。15～16人の会合だったが、半分はイギリス人、後の半分は元々、ユーゴのどこかの出身者で、イギリスに来て研究者なりジャーナリストなりになって母国の動向をイギリスでフォローしている人たちだと分かった。チャタム自体はそう巨大な組織というわけでもなく、予算も限られていたが、何かの問題が起きた時に、どこにそれに関連する研究者がいるのかを把握しており、チャタムが声をかけるとそういう人が集まって来るという、いわばソフトの面の強さがあると分かってきた。（フレデ